『詩經』註釋史における「毛詩舉要圖」の意義

原田　信

はじめに

『詩經』には歴代數多くの註釋が著された。毛傳や鄭箋以來『詩經』の內容を總合的に解釋した註釋がある中で、陸璣『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』など專ら名物を解釋した註釋もある。これら註釋の多くは文字により解說されたが、圖によって解說するものも少なくなかった。北宋以前の圖は多くが散佚しており、その內容は明らかでない。だが書名から推測するに『詩經』の情景や人物、鳥獸草木を圖示したものが存在していたようである。[1]

これに對して現存する早期の圖解は二つある。一つは「毛詩正變指南圖」（以下「指南圖」）であり、もう一つは「毛詩舉要圖」（以下「舉要圖」）である。

「指南圖」は南宋の紹興年間（一一三一～一一六二）に楊甲が編纂した『六經圖』中の圖解である。『六經圖』は南宋時に增補、改訂が行われたが、このうち乾道元年（一一六五）撫州教授の毛邦翰などが增補し、明・萬曆四十三年（一六一五）吳繼仕が重刻したものが早期の樣子を傳えている。吳繼仕の重刻本は明、淸代を通じて重刻された。[2]

一方、「舉要圖」は紹熙年間（一一九〇～一一九四）建陽の書肆が刊刻した『纂圖互注毛詩』の卷頭に附された圖解である。別版が現存することから、南宋時には何度か刊行されたと考えられる。だが「指南圖」とは異なり後世重刻されることはなかった。

『詩經』の圖解は、古人が『詩經』中の事物や事象にどのような關心を持ち理解に努めたのかを視覺的に傳える註釋である。圖解は『詩經』の註釋史を考える上で、文字による註釋とともに忘れてはならない存在だといえるだろう。中でも現存する早期の圖解である「指南圖」と「舉要圖」は、圖解が註釋史において擔った役割や影響を明らかにする起點となるべき資料である。

そうであるにも關わらず、兩圖の存在とその意義はこれまで注目されてこなかった。特に書肆が編纂した「舉要圖」は後世僅かに傳わったのみで、關心を持たれることはなかった。そこで本論ではあまり知られることのない「舉要圖」を取り上げ、その內容と特徵を紹介するとともに、他の圖解への影響、利用及びその背景から、『詩經』註釋史における同圖解の意義を考察する。

一、「舉要圖」の內容と特徵

「舉要圖」はどのような圖解なのか。これは他の圖解と比較することで、より明確なものとなるだろう。以下では「舉要圖」と「指南圖」との間に存在する異同から「舉要圖」の內容、及び特徵を述べる。

a.「舉要圖」と「指南圖」の類似

現存する「舉要圖」は二本ある。一つは避諱により南宋の紹熙年間に建陽で刊刻されたと考えられる『纂圖互注毛詩』の圖解である。これは臺灣故宮博物院に所藏されている。もう一つは靜嘉堂文庫所藏のもので圖解のみが傳わる。避諱は高宗（在位一一二七～一一六二）までだが、圖解の解說に見える文字は限られるため、刊刻年代は特定し難い。二つの「舉要圖」は別版だが內容は同じものである。[3]

二つの「舉要圖」はどちらも三十圖から構成されている。他に二十五圖のものがあったようだが存佚は確認されていない。[4] 三十圖の項目は表一の通りである。[5]

このように「舉要圖」には地理や天文、祭祀、時刻、建築といった制度や器物、學問の系譜を示す圖表が收められている。各圖の說明の多くは毛傳や鄭箋、正義を略述したものである。

そして「舉要圖」より前に編纂されたのが「指南圖」である。これは紹興年間に昌元（現在の四川重慶）の楊甲が編纂した『六經圖』中の圖解である。現存する諸版本のうち早期の樣子を傳える吳繼仕重刻毛邦翰增補本によると「指南圖」の項目は表二のようになる。[6]

表中、諸事物を圖示するのは15～31であり、1～14と32～45は表である。このうち41～44には圖が無く「已上形制並見二禮圖」と注記が

【表一】「舉要圖」の項目

①十五國風地理圖(15)	②大東總星之圖	③公劉度夕陽圖(17)	④楚丘定星中圖(18)	⑤七月流火圖	⑥三星在天圖
⑦挈壺之圖(19)	⑧太王胥宇圖	⑨宣王考室圖	⑩文武豐鎬之圖	⑪春藉田祈社稷圖(24)	⑫巡守柴望告祭圖(25)
⑬靈臺辟雍之圖(28)	⑭閟宮路寢之圖(27)	⑮我將明堂之圖(26)	⑯諸侯泮宮之圖(28)	⑰兵器之圖(44)	⑱周元戎圖
⑲秦小戎圖(30)	⑳有鼓始作樂圖(43)	㉑絲衣繹賓尸圖(41)	㉒朝服之圖(41)	㉓后夫人婦人之服圖(41)	㉔冠冕弁圖(41)
㉕帶佩芾圖(41)	㉖衣裘幣帛之圖(41)	㉗祭器之圖(43)	㉘樂舞器圖(43)	㉙器物之圖(43)	㉚四詩傳授之圖上、下(45)

※括弧中の數字は表二にある「指南圖」中にて對應する項目である。

【表二】毛邦翰本「指南圖」項目一覽表[7]

1 詩篇名	2 作詩時世	3～12 周、召、衞、齊、鄭、曹、陳、晉、秦、宋世次	13 族譜	14 十五國風譜	15 十五國風地理圖
16 日居月諸圖	17 公劉相陰陽圖	18 楚丘揆日景圖	19 齊國風挈壺氏圖	20 大田雨我公田圖	21 甫田歲取十千圖
22 百夫之田	23 萬夫之田	24 載芟藉田圖	25 時邁巡狩圖	26 我將明堂圖	27 清廟閟宮圖
28 辟雍泮宮圖	29 斯干考室圖	30 秦國風小戎圖	31 商頌王畿圖	32～40 釋草、木、菜、穀、鳥、獸、蟲、魚、馬名	41 釋衣服制名
42 釋車馬器名	43 釋禮樂器名	44 釋兵農器名	45 四詩傳授圖		

「舉要圖」にも收錄されている項目　…　字

ある。『六經圖』の「周禮文物大全圖」と「禮記制度示掌圖」に關聯する事物の圖があるため省略したのである。また、動植物に關する32～40には圖も注記も見えず、當初より圖が無かったようである。

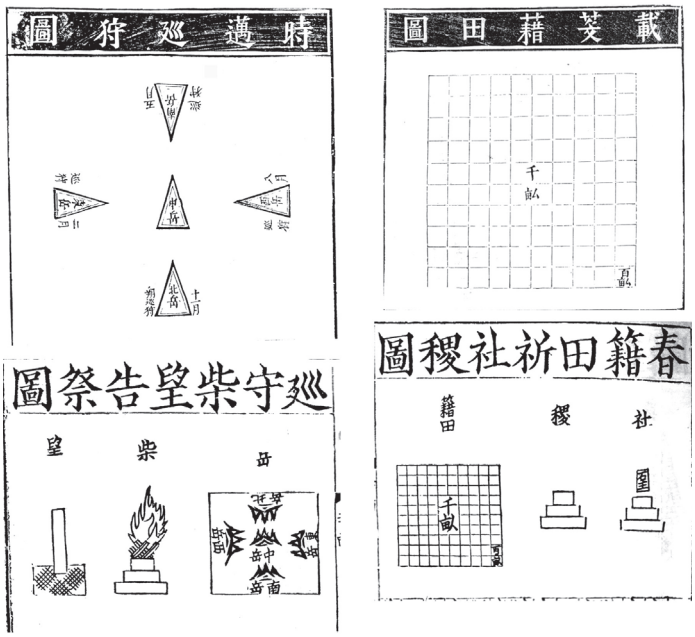
「指南圖」と「舉要圖」とには幾つかの共通點がある。まず「指南圖」にある15、17～19、24～30、41～45の計十六項目の内容は「舉要圖」と共通する。そして兩圖の構成は、「指南圖」前半の表を除き、共に地圖である「十五國風地理圖」から始まって、表である「四詩傳授圖」で終わり、この間に收錄されているのは三十項目である。

このような「舉要圖」と「指南圖」との項目や構成の類似、そして「指南圖」以前に兩圖のように諸事物を總合的に圖示した圖解の存在が確認されないことからして、「舉要圖」は一から編纂されたのではなく、「指南圖」を底本としたか、「指南圖」の構成や内容に着想を得て編纂された可能性が高い。但し「舉要圖」の刊刻當時、『六經圖』には複數の版本が存在していた。このため「舉要圖」が「指南圖」に依據したとしても、それが現在見られる毛邦翰增補本であったかどうかは斷定しがたい。[8]

b. 「指南圖」と「舉要圖」の相違

「指南圖」と「舉要圖」との間には相違點も存在する。兩圖の相違は様々だが、ここでは「舉要圖」の特徴を明らかにする上で次の三點を取り上げる。

第一點は「舉要圖」が獨自の圖を收錄していることである。「舉要圖」は、「指南圖」には無い「②大東總星之圖」「⑤七月流火圖」「⑥三星在天圖」「⑧太王胥宇圖」「⑩文武豐鎬之圖」の五圖を收錄している。また「舉要圖」の「⑪春藉田祈社稷圖」には「指南圖」の「24載芟藉田圖」には無い「社稷」圖があり、「舉要圖」の「⑫巡守柴望告祭圖」は「指南圖」の「25時邁巡狩圖」に相當するが、「巡狩」の際に祀る五嶽の圖は別の圖に置き換えられ、「巡狩」と共に周頌の「時邁」に詠まれた「柴望」圖が加えられている。（圖一）。

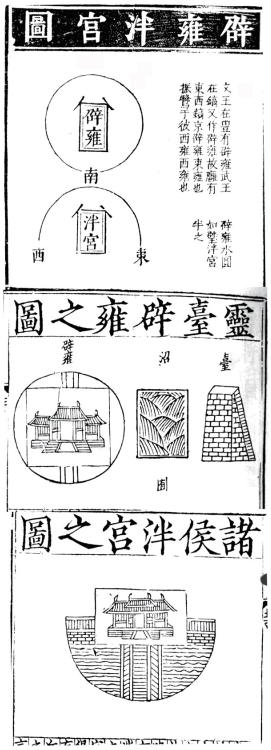


【圖一】右上「指南圖」の「24載芟藉田圖」　右下「舉要圖」の「⑪春藉田祈社稷圖」
左上「指南圖」の「25時邁巡狩圖」　左下「舉要圖」の「⑫巡守柴望告祭圖」

第二點は引用文獻の違いである。「指南圖」の「19齊國風挈壺氏圖」には唐の呂才『呂才刻漏經』一卷と北宋の燕肅『蓮花漏法』一卷の漏刻圖が收錄されている。[9] これに對して「舉要圖」の「⑦挈壺之圖」には、より新しい王普（北宋後期～南宋初）の『蓮花漏圖』と『官曆漏刻圖』各一卷の圖が引用されている。[10]

第三點は「舉要圖」が視覺をより重視したことである。辟雍や泮宮、考室などの建築物について「指南圖」は位置や配置を示した平面圖を收錄するが、「舉要圖」は形狀を圖示している（圖二）。前者は建築の理論面を重んじ、後者は視覺面を重んじたのである。

以上のように兩圖の違いは項目の名稱や分類といった表層的な事柄のみならず、內容にまで及んでいる。「舉要圖」が「指南圖」に依據した可能性が高いことは先述した通りだが、依據したとしても「指南圖」を剽竊したものでなかった。兩圖の差異、卽ち圖の追加や改編、より新しい文獻の引用や視覺面を重んじる編纂といった點から、「舉要圖」は「指南圖」の古い內容を改め、より見やすくすることを目的に增補、改訂された圖解だったと考えられる。「舉要圖」が「指南圖」の完成から三十～六十年餘りを經て書肆により編纂されたことからすれば、「舉要圖」に見られる增補や改訂の背景には、より新しく視覺的な圖解に對する需要が存在していたのだろう。



【圖二】（上「指南圖」中・下「舉要圖」）

二、「舉要圖」が後世の『詩經』圖解へ與えた影響

現存する早期の『詩經』圖解である「指南圖」と「舉要圖」のうち、前者は明代に重刻されて以後『四庫全書』に收錄されるなど、明、淸代を通じてその存在を知られた。これに對し、後者は南宋以後、再び刊刻された形跡はなく、明代以降は複數傳わったものの、それも一部の藏書家の手を經たに過ぎない。[11] 南宋時に刊刻された「舉要圖」のみを取り上げるならば、『詩經』の註釋として「舉要圖」が與えた影響は南宋の一時期に限定される。しかし「舉要圖」の影響を受けたと考えられる圖解に「六經圖碑」がある。[12]

「六經圖碑」は元末の至正年間（一三四一～一三七〇）、盧天祥が信州（現在の江西上饒市）に建立したと傳わる。[13]「六經圖碑」の項目は表三の通りである。[14]

項目名のみによれば、「六經圖碑」と「指南圖」及び「舉要圖」との對應關係は表三のようになる。しかし、項目名と圖は明確に對應していない。例えば、「2七月流火之圖」は「舉要圖」に初出の圖だが、「六經圖碑」の圖はこれと異なる。「4楚丘定星中圖」は「舉要圖」にある項目で「指南圖」にも「18楚丘揆日景圖」として對應する圖だが、「六經圖碑」の圖は兩圖とは全く異なる。「5公劉相陰陽圖」は「舉要圖」にある項目名だが、實際の圖は「指南圖」と類似している（圖三）。

【表三】「六經圖碑」の項目一覧

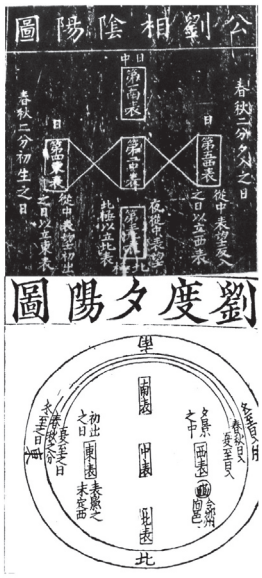
1 思無邪圖	2 七月流火之圖	3 大東總星之圖	4 楚丘定星中圖	5 公劉相陰陽圖
6 四始圖	7 十五國風地理之圖	8 豳公七月風化之圖	9 十五國風、大小雅、三頌譜	10 詩有六義三經三緯之
11 名稱不明	12 經緯總圖	13 經緯正變之圖	14 靈臺之圖	15 辟雍之圖
16 泮宮之圖	17 皋門應門之圖	18 周元戎圖	19 秦小戎圖	20 公車千乘之圖
21 出車一乘之圖	22 冠服俎豆圭璧之圖	23 樂器周車戈矛之圖	24 毛詩小序之圖	25 鳥獸草木之名

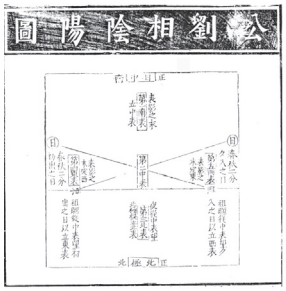
「毛詩正變指南圖」と同一、または類似する項目 … 字
「毛詩舉要圖」と同一、または類似する項目 … 字
兩圖と同一、または類似する項目 … 字

一方で「3大東總星之圖」には解説が無く、「18周元戎圖」は解説が異なるといった相違があるが、ともに「舉要圖」の圖である（圖四）。また14～16は、建築物の形狀が圖示された「舉要圖」の圖を收錄している。「六經圖碑」と「舉要圖」、「指南圖」との間に存在する項目名や圖の不一致は、碑の作成時に圖が改編されたか、或いは「六經圖碑」が基づいた圖が「舉要圖」や「指南圖」とは異なるものだった可能性がある。だが「六經圖碑」には「舉要圖」の項目名や圖が存在していることから、少なくとも「六經圖碑」は「舉要圖」か、或いは「舉要圖」を元に編纂された何らかの圖解から影響を受けたと考えられる。

この他、元の至正二十八年（一三六三）雙桂堂が重刊した羅復『詩

【圖三】右上「六經圖碑」右下「舉要圖」左「指南圖」





圖四（上「六經圖碑」下「舉要圖」）

集傳名物鈔音釋纂輯』二十卷の卷頭には、「六經圖碑」の一部の項目に「舉要圖」等の項目を加え、さらに朱熹『詩集傳』を抜粋し附した「詩傳圖」が收錄されている。[15]

後世、「六經圖碑」は諸家に刊刻され廣まった。筆者の調査によると「六經圖碑」を用いた著作には次のようなものがある。まず萬曆四十二年（一六一四）盧謙が「六經圖碑」を校勘した『五經圖』六卷を刊刻した。[16]『五經圖』は更に盧謙の子孫が十二卷に增補し、雍正二年（一七二四）に重刻した。[17]この他、康熙四十八年（一七〇九）には江爲龍が「六經圖碑」に「四書」の圖解を附した『朱子六經圖』十六卷を編纂し、乾隆九年（一七四四）には鄭之僑が「六經圖碑」を增補して『六經圖』二十四卷を編纂した。[18]

また『詩集傳名物鈔音釋纂輯』の「詩傳圖」を主として、他の圖や朱熹などの言說を增補したものに、明の永樂年間に刊刻された大字本『詩經大全』の圖一卷や萬曆三十三年（一六〇五）の『葉太史參補古今大方詩經大全』十五卷の圖一卷、[19]雍正五年（一七二七）『欽定詩經傳說彙纂』二十一卷の卷頭の圖解がある（圖五）。[20]宣統三年（一九一二）上海の書肆「章福記」が刊行した石印本『繪圖監本詩經』卷頭の圖解は、書名に監本と冠していることから『欽定詩經傳說彙纂』の圖解を抄錄したものと推測される。

以上のように「六經圖碑」や「詩傳圖」は明代から清末まで編纂された『詩經』圖解の底本となった。「舉要圖」はこの二つの圖に組み込まれたことで、元、明以降用いられた圖解の原形となり、形を變えながらも長期に渡って參照されたのである。

【圖五】（上二圖「詩傳圖」　下二圖『葉太史參補古今大方詩經大全』）

三、『詩經』註釋としての用途と意義

長期に渡って參照されたと考えられる「舉要圖」が『詩經』の註釋として擔った意義とは何だったのか。この問題を明らかにする上で「舉要圖」の用途は重要な手がかりである。「舉要圖」の利用に關する記載は極めて少ないが、以下では限られた記載や他の圖解をめぐる情況から同圖解の用途と意義を述べる。

a．科舉受驗

「舉要圖」の用途については、清代諸家の見解がある。なかでも早い時期のものは朱彝尊（一六二九～一七〇九）の『經義攷』に記された陸元輔（一六一七～一六九一）の見解である。陸元輔は『纂圖互注毛詩』について「蓋し唐宋人帖括の書なり」と推測している。[21] 同様の見解はその後の諸家も述べている。[22] 清人の見解によれば「舉要圖」は科舉受驗の參考書の類であった『纂圖互注毛詩』の附錄となる。この見解は概ね正しいだろう。なぜならば「舉要圖」と同じく經書の圖解である『六經圖』が諸生の參考書として利用されていたからである。毛邦翰本『六經圖』苗昌言序には次のようにある。

陳大夫爲撫之期年……既已創闢試院、以奉聖天子三年取士之制。又取六經圖、命泮宮職講肄者編類爲書、刊之於學、以教諸生。

（陳大夫撫を爲むるの期年……既已に試院を創闢し、以て聖天子三年取士の制を奉ぜり。又た六經圖を取り、泮宮の講肄を職りし者に命じて編類して書と爲さしめ、之を學に刊し、以て諸生に教えたり。）

冒頭の陳大夫は『六經圖』序の官銜に撫州教授の陳森と見える。序には陳森が撫州に赴任した際、科舉實施のために「試院（科舉の受驗場）」を開設したことと、教育のため州學に『六經圖』の刊刻を命じたことが竝記されている。他にも同様の記載が見えることから、[23] 南宋當時、『六經圖』は科舉受驗の學習と密接な關係にあったと考えられる。同じく經書の圖解である「舉要圖」も、主に科舉受驗の學習に用いられたと推測される。

b．考證

「舉要圖」の用途については少數ながら別の見解も存在する。例えば清の翁方綱（一七三三～一八一八）は次のように述べている。

考證之學、至南宋益加審細。故其時坊客亦多勤求博采、取資學人之用。如經籍則有纂圖互注重言重意諸刻。

（考證の學、南宋に至りて益ます審細を加ふ。故に其の時の坊客も亦た多く勤めて求め博く采り、學人の用に取資す。經籍に則ち纂圖互注重言重意の諸刻有るが如し。）　（翁方綱『復初齋文集』卷十七「跋寶刻類編」）

文中の「纂圖互注重言重意諸刻」とは「舉要圖」が附された『纂圖互注毛詩』を含む「纂圖互注本」のことである。[24] 翁方綱は「纂圖互注本」刊刻の要因として南宋における考證學の發展がその背景にあると考えた。この見解によるならば、「舉要圖」の類は科舉受驗の學習のみならず、事物の考證にも用いられたということになる。

圖解と考證との關係を明示する記載は「舉要圖」と同時代にはほとんど見られない。だが、『朱子語類』（以下『語類』）には圖解の參照價値を認めた次のような記載がある。[25]

書坊印得六經、前面纂圖子、也略可觀。如車圖、雖不甚詳、然大概也是。　義剛

（書坊六經を印し得たり、前面に圖子を纂め、也た略や觀るべし。車圖の如きは、甚しくは詳しからずと雖も、然るに大概も也た是なり。）

（『語類』卷一三八・雜類）

引用文に見える「圖子」は六經の「前面」、卽ち卷頭に附されている。これは全篇が圖解により構成される『六經圖』のような圖解本ではなく、「舉要圖」と同じ形式の圖解本である。また、朱熹の言葉を記錄した黃義剛は紹熙四年（一一九三）の半年閒と慶元五年（一一九九）からこの翌年初めまで朱熹に師事した人物であることから、[26] 「圖子」は紹熙年閒の刊刻とされる「舉要圖」とほぼ同じ時期、書肆によって刊

刻されたと考えられる。

さらに引用文中、朱熹は書肆の印刷した「圖子」に對し「一應は參照する價値がある」と評し、その一例として「車圖」が概ね正確であることを擧げている。このように朱熹が參照價値を認めていたのは六經の「圖子」に限らない。

①　問今冠帶起於何時。曰看角抵圖所畫觀戲者盡是冠帶、立底屋上。坐底皆戴帽繫帶、樹上坐底也如此。

（問ふ、今の冠帶何の時に起こるやと。（朱熹）曰く、角抵圖に畫かるる所の戲を觀る者を看るに盡く是れ冠帶、屋上に立つ。坐るもの皆な帽を戴き帶を繫ぎ、樹上に坐るものも也た此の如しと。）

（『語類』卷九十一）

②　服議、漢儒自爲一家之學、以儀禮喪服篇爲宗……可試考之、畫作圖子、更參以通典及今律令、當有以見古人之意不苟然也。

（服議は、漢儒自ら一家の學を爲し、儀禮喪服篇を以て宗と爲す……試しに之を考ふべければ、畫きて圖子を作し、更に參ずるに通典及び今の律令を以てすれば、當に以て古人の意を見ること苟然たらざる有るべきなりと。）

（同上卷八十九）

③　要作地理圖三箇樣子。一寫州名、一寫縣名、一寫山川名、仍作圖時、須用逐州正斜、長短、闊狹如其地形、糊紙葉子以剪。

（地理圖を作らんことを要すれば三箇の樣子なり。一に州名を寫し、一に縣名を寫し、一に山川の名を寫し、仍ねて圖を作すの時、須く用て州の正斜、長短、闊狹を逐いて其の地形の如くし、紙葉子を糊し以て剪るべしと。）

（同上卷二）

①にあるように、朱熹は古代の衣冠制度を考える上で「角抵圖」を參照している。一方、②では裝束を考證する上で諸書を參照して圖を作成するよう門弟に勸め、③では地圖を正確に作成する方法を述べている。圖に言及した朱熹の言葉は多數傳わっており、朱熹が事物を考證する上で圖の參照價値を認め、積極的に利用していたことは明らかであろう。[27]

圖解を重視する朱熹の態度は『詩經』の解釋についても同樣であった。例えば、次のような記載がある。

載弄之瓦。瓦、紡磚也、紡時所用之物。舊見人畫列女傳、漆室乃手執一物、如今銀子樣。意其爲紡磚也、然未可必。

（「載ち之に瓦を弄せしむ。」瓦は、紡磚なり、紡ぐ時に用いる所の物なり。舊く人の列女傳を畫くを見れば、漆室乃ち手に一物を執る、今の銀子の樣が如し。其れ紡磚爲らんかと意うなり、然れども未だ必たるべからず。）

（『語類』卷八十一）

「載弄之瓦」は『詩經』小雅の「斯干」にある一句である。朱熹『詩集傳』の該當箇所には『列女傳』の繪によって「瓦」を考證したことは見えず、『詩集傳』全篇に渡っても圖解を參照した記述は見えない。[28]だが、この記載からは朱熹とその門弟達が『詩經』の名物解釋にも圖解を用いたことが伺われる。

以上はいずれも「舉要圖」に對して直接的に言及したものではない。しかし「舉要圖」と同時期に刊刻された同種の圖解や繪畫が經書の考證において參照されていたであろうことは、「舉要圖」にも考證に用いられる一面があった可能性を示唆している。

c．考證における圖解の參照價値

それでは、なぜ朱熹は圖解の參照價値を認め考證に用いたのか。『詩經』の考證について言えば、漢代以降、『詩經』の註釋として毛傳を

始め様々な傳や鄭箋などが著された。また、三國の陸璣『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』のように特定領域の名物を考證した註釋も著された。多くの名物はこれらの註釋の中で説明されている。無論、これらの註釋が著された當時と朱熹の頃では時間、文化ともに相當な隔たりがあり、註釋に據っても不明なものが存在したであろうことは想像に難くない。しかし、これは文字によっても考證できることであり、必ずしも圖解を參照する必要はない。圖解を參照した理由は、むしろ朱熹の經書解釋に對する態度と關係があると考えられる。朱熹の態度については次のような記載がある。

學者觀書、先須讀得正文、記得注解、成誦精熟。注中訓釋文意、事物、名義、發明經指、相穿紐處、一一認得如自己做出來底一般、方能玩味反覆、向上有透處。若不如此、只是虛設議論、如舉業一般、非爲己之學也。

（學者は書を觀るに、先ず須く正文を讀み得て、注解を記へ得、成誦精熟すべし。注の中に文意、事物、名義を訓釋すると、經指を發明するとは、相ひ穿紐する處、一一認め得ること自己の做し出し來たる一般の如きならば、方に能く玩味反覆し、向上に透る處有り。若し此くの如くならざらんば、只だ是れ虛しく議論を設けること、舉業一般の如し、己の爲の學に非ざるなり。）

（『語類』卷十一）

引用文にあるように、朱熹は經書の內容を明らかにし通曉する心得の一環として、註釋中の事物やその名稱、意味に通じることを重視した。これは『詩經』も例外ではなかった。

此詩之義、有不可知者。今姑釋其訓詁名物、而略以王氏、蘇氏之說解之、未敢信其必然也。

（此詩の義、知る可からざる者有り。今姑く其の訓詁名物を釋し、而して略ぼ王氏、蘇氏の說を以て之を解くも、未だ敢て其の必然たるを信ぜざるなり。）

（『詩集傳』卷十三の小雅「鼓鐘」）

この例のように、朱熹は「詩」の意味が不明であっても、まずは名物解釋を行った。當然、名物解釋を重視する最終目的は「詩」全體の意味を明らかにすることである。

『詩經』について言えば、名物解釋を重視した背景には、朱熹が各詩の主旨を記した「小序」を廢し『詩經』の正文を主軸として『詩經』を再解釋しようとしたことが關係していると考えられる。

朱熹が「小序」を廢したのは、遡れば北宋以後、特に劉敞や歐陽修、蘇轍などの人々により「小序」や毛傳、鄭箋といった舊來の註釋に對する批判と新しい見解が示されたことに端を發しているが[29]、朱熹に直接的な影響を與えたのは北宋の鄭樵（一一〇四～一一六二）の『詩辨妄』であった[30]。また、この流れから新奇な見解が亂立する狀況が現れたことも「小序」を廢し再解釋した要因の一つであった[31]。一方で、朱熹の時代、『詩經』の一般的な解釋は依然として「小序」に據っていたが、朱熹は「小序」を漢儒の作と斷じ、「小序」のために卻って解釋し難い箇所があると認識していた[32]。

このような狀況下で朱熹が主張したのは、『詩經』本文を繰り返し讀み「詩意」や「義理」に通曉することであった。『詩經』を學ぶ方法について朱熹が「熟讀」や「玩味」といった語を多用するのはこのためである[33]。だが、古來より「小序」が『詩經』解釋の基礎であった以上、これを廢し『詩經』を理解するのは容易なことではない。例えば、北宋の程顥（一〇三二～一〇八五）は細かな解釋に拘らず、朱熹と同樣に「詩」を味わうことを重視したが、「詩」を理解する上では「詩序」を大きな手がかりと見なしている[34]。これに對し朱熹は「詩意」や「義

理」に通曉するために、字義や音韻とともに名物の考證を解釋の手がかりとした。書肆が編纂、刊刻した「圖子」や「舉要圖」に類する圖解の參考價値が朱熹により評されたのも、以上のような經書の再解釋と讀書方法の變化が背景にあったからであろう。

但し、朱熹より前に圖解の參照價値に着目した人物がいる。それは鄭樵である。鄭樵は圖解の價値について次のように述べている。

後人學術難及、大概有二。一者義理之學、二者辭章之學。……要之、辭章雖富、如朝霞晚照、徒焜燿人耳目、義理雖深、如空谷尋聲、靡所底止。二者殊途而同歸、是皆語言之末、而非實學也。所以學術不及三代、又不及漢者、抑有由也。以圖譜之學不傳、則實學盡化爲虛文矣。

（後人の學術の及び難きは、大概二有り。一は義理の學、二は辭章の學なり。……之を要すれば、辭章富と雖も、朝霞晚照の如く、徒に人の耳目を焜燿せしめ、義理は深しと雖も、空谷に聲を尋ぬるが如く、底止する所靡し。二者の途を殊にして同に歸すは、是れ皆な語言の末にして、實學に非ざるなり。學術の三代に及ばず、又た漢に及ばざる所以は、抑そも由有るなり。以て圖譜の學傳わざれば、則ち實學盡く化して虛文と爲らんか。）

（『通志』圖譜略・原學　中華書局　二〇〇九年による）

鄭樵はともすれば空理空論に陷りかねない「義理」や修辭に偏重した「辭章」の學のみを行うことを「虛文」と批判し、圖解の利用による「實學」の實現を訴えた。上述したように、「小序」を廢するという朱熹の發想に直接的な影響を與えたのは鄭樵の『詩辨妄』であった。『詩辨妄』やその他の著書の多くは散佚しており、鄭樵が『詩經』の解釋に當たって圖解を參照したかどうかは明らかにし難い。朱熹についても『通志』圖譜略に言及した記載は傳わっていない。だが、少なくとも學術において實學を重んじる傾向が現れた時點で、圖解の正確性が評價され、利用される環境は既に形成されていたのである。

おわりに

本論では、特徵、他の圖解への影響、『詩經』註釋としての用途と意義という三點から「舉要圖」について考察した。結果として「舉要圖」が「指南圖」をもとに新たな文獻を收錄し、さらにそれまで圖示されなかった事柄を圖示したこと、後世の圖解の原形となり長期に渡り參照されたこと、科舉受驗の參考としてのみならず『詩經』を再解釋するための手がかりであった名物考證のために參照され、その背景には北宋の鄭樵以來の實學を重んずる考えが存在していた可能性を指摘した。

圖解の基本的な特性とは、讀者や聽衆といった受け手の理解を容易にして正確に傳達するものである。『六經圖』が科舉學習と密接な關係があり、科舉受驗の參考書と推測される『纂圖互注毛詩』に「舉要圖」が附され、ひいては『詩經』解釋の新たな試みの中で參照された可能性があるのはこのためである。

本論では『詩經』註釋史における「舉要圖」の意義を考察するため、「舉要圖」の特徵とともに、圖解と考證、實學との關係を中心に論じてきた。但し、もう一つ注意を拂うべきは、所謂學術的な觀點からは輕視されてきた側面、卽ち科舉受驗の參考書としての側面である。科舉は大多數の知識人が受けたと推測され、讀者の量や範圍から見れば、參考書としての利用が最も多く、廣範圍に影響を與えただろう。圖解が科舉の參考書として利用された狀況やその影響も「舉要圖」の意義を考える上で無視できない事柄である。この點については稿を改めて論

じてみたい。

註釋

（1）早い時期の圖解には東晉の『毛詩圖』（『太平廣記』卷二百一十三・程修己傳）や南朝・梁代の『毛詩圖』三卷、『毛詩孔子經圖』十二卷、『毛詩古賢聖圖』二卷（『隋書』卷三十三・經籍志）がある。その後、唐代には文宗が作成させた『毛詩圖』（『太平廣記』程修己傳）や『毛詩草木蟲魚圖』二十卷（『新唐書』卷五十七・藝文志）があり、宋代には眞宗が閲覧した『五經圖』（『玉海』卷二十七・觀書）、馬和之の描いた『詩經』の圖があった。馬和之の圖以外はすべて傳わらない。

（2）清の王嵩『六經圖定本』（『四庫全書存目叢書』經部・第一五三冊所收）自序は吳繼仕以降重刻された『六經圖』について「迨萬曆乙卯、新安吳君繼仕校讎摹刻、極其精工、卷帙亦頗修廣。踰年丁巳、蘭溪郭君若維依樣翻刻、宛若吳本、是窮經之士所珍祕。康熙己丑、龍眠江氏宗石刻縮爲常帙。又壬寅瀨上潘君宗鼎宗吳本、斂若羣書、式別署禮耕堂本」と述べている。また、天啓六年（一六二六）の陳仁錫『經世八編類纂』（內閣文庫藏林家本三六七―五による）や『四庫全書』經部一百七十七にも毛邦翰增補本が收錄されている。

（3）兩圖は略字を用いる箇所や圖中の模樣が異なる。台灣故宮本の刊刻年代は阿部隆一『中華民國國立故宮博物院北平圖書館宋金元版解題』（『中國訪書志』汲古書院　一九七六）九頁、靜嘉堂本については『靜嘉堂文庫宋元版圖錄・解題篇』（汲古書院　一九九二）三頁による。

（4）朱彝尊『經義攷』（中華書局　一九九八）卷一一一には「此書不知何人編輯、鋟刻甚精。首之以毛詩舉要圖二十五」とある。これは表一にある項目よりも②～⑦の項目が少ない。

（5）『景印宋本纂圖互注毛詩』（臺灣故宮博物院　一九九五）を用いた。

（6）中国北京首都圖書館藏の吳繼仕重刻『六經圖』影印本（學苑出版社　一九九七）を用いた。吳繼仕本は「摹刻宋板六經圖」と題しているが、書中の文字には明朝體が用いられており完全な摹刻ではない。

（7）陳振孫（一一八三～一二六一）『直齋書錄解題』（徐小蠻・顧美華點校上海古籍出版社　一九八七）が引く『館閣書目』によれば、毛邦翰が增補した「指南圖」は元來四十七圖であり、現在傳わる毛邦翰本はこれよりも二圖少ない。

（8）宋の度正（一一六六～一二三五）『性善堂稿』（『景印文淵閣四庫全書』第一一七〇册台灣商務印書館）卷十三「涪州教授陳孚由墓誌銘」には陳孚由（？～一二〇九）が『六經圖』の石碑を建立した時の狀況として「好事者版行之、徧天下」「遂訪善本、重加校正、仍命工筆札善圖畫者寫之、刻之石、以示學者」とあり、南宋の頃『六經圖』には良劣樣々な版本が存在していたらしい。また陳振孫『直齋書錄解題』卷三によると毛邦翰增補本以外にも葉仲堪の重編本が存在していた。

（9）「指南圖」には「今因舊圖取唐之呂才、今之燕肅所制、列之于圖」とある。「舊圖」は楊甲が編纂した最初の『六經圖』である。『呂才刻漏經』と『蓮花漏法』はともに佚書であり『宋史』卷二〇七藝文志の曆算類に見える。

（10）王普の漏刻圖はともに散佚したが『直齋書錄解題』卷一二に解題が見える。

（11）臺灣故宮博物院藏『纂圖互注毛詩』には項篤壽（明・嘉靖隆慶間）、項靖（同左）、程德潤（一七八七～？）、傅增湘（一八七二～一九五〇）など、靜嘉堂所藏「毛詩舉要圖」には季振宜（一六三〇～？）、陳驥德（咸豐同治間）、陸心源（一八三八～一八九四）等の藏書印が鈐されている。『經義攷』所載の二十五圖本は他書に見えない。

（12）「六經圖碑」より前に刊刻された建陽刊巾箱本『六經圖』（臺灣故宮博

物院所藏）に「詩經圖說」という圖解がある。これは「舉要圖」と「指南圖」を折中し、さらに新たな圖と歐陽修『詩本義』の抄略を增補したものである。「舉要圖」の影響を考える上で興味深い圖解だが、殘卷が傳わるのみで全貌が明らかではないため、ここで紹介するに止める。

(13) 『明一統志』卷五十一・廣信府・名宦には「江西廣信府名宦元盧天祥至元中守信州、興學校、崇詩書、刻六經圖於石、立兩龐下、則知今廣信府六經圖石刻、即元至元中盧天祥所立、蓋本昌州六經圖碑、宋紹興中楊甲所著者」とある。

(14) 北京大學圖書館藏の淸拓本（B3521）による。

(15) 本論では「中華再造善本」（国家圖書館出版社　二〇〇六年）所收の影印本（原本は中國國家圖書館藏）を用いた。「詩傳圖」の項目は㊀思無邪圖、㊁四始圖、㊂正變風雅之圖、㊃詩有六義之圖、㊄十五國風地理之圖、㊅靈臺辟雍之圖、㊆皐門應門之圖、㊇泮宮圖、㊈大東總星之圖、㊉七月流火之圖、㊉㊀楚丘定之方中之圖、㊉㊁公劉相陰陽之圖、㊉㊂豳公七月風化之圖、㊉㊃冠服圖、㊉㊄衣裳圖である。㊀、㊁、㊃、㊆、㊉㊂は「六經圖碑」初出の圖、㊂は「詩傳圖」初出の圖、その他は「舉要圖」などに既出の圖である。

(16) 『五經圖』章達序には「侍御芳菱盧公……自永豐令歸攜帶信州學五經圖石本以授余……亟命宮刻石、樹之學宮。已又念摹搨之難、不及行遠、更損爲卷帙」とある（以上註（17）の盧雲英重刊『五經圖』原序による。盧謙『五經圖』は『四庫全書存目叢書』經部・第一四七册にあるも序文が不鮮明）。本書は『五經圖』と稱するが、實際には『易』『書』『詩』『春秋』『禮記』『周禮』六經の各圖が收錄されている。

(17) 淸・盧雲英重刊『五經圖』（『四庫全書存目叢書』經部・第一五二册）による。

(18) 鄭之僑『六經圖』（北京大學圖書館藏の請求番號 x/090.87/8732 による）雷鋐序には「廣信學宮原有六經圖石刻、備學者窮經稽古之資。吾門鄭君東里宰鉛山、每至鵝湖書院、與諸生講論經學按圖指畫、患其校定未精、譌舛閒出。爰細加攷證」とある。

(19) 『詩經大全』は宮內廳所藏本（請求番號四五〇函六號）、『葉太史參補古今大方詩經大全』は早稻田大學圖書館藏本（請求番號は古書資料庫ロ12-0333）による。兩書の凡例には圖の典據について「名物附圖、一依廬陵羅氏所集諸國世次及作詩時世圖、一依安成劉氏、存之以備觀覽」とある。廬陵羅氏は羅復、安成劉氏は劉瑾、ともに元代の人、それぞれ『詩集傳名物鈔音釋纂輯』『詩集傳通釋』各二十卷を著した。『詩集傳名物鈔音釋纂輯』の「詩傳圖」については本文に既述。『詩集傳通釋』は複數傳わるが、圖が附された版本について筆者は未見である。

(20) 圖の典據は明記されていないが、「詩傳圖」に初出の圖がある上、圖の順序も「詩傳圖」と同樣である。

(21) 『經義攷』卷一一〇「纂圖互注毛詩」條による。

(22) 例えば陳鱣（一七五三～一八一七）『經籍跋文』（商務印書館『叢書集成』初編　一九三六）の「宋本毛詩跋」には「宋時各經諸子皆有重言重意、蓋經生帖括之書」とあり、楊紹和（一八三〇～一八七五）『楹書隅錄』（『淸人書目題跋叢刊』三　中華書局　一九九〇）卷一「監本纂圖重言重意互注點校毛詩」には「蓋猶是宋人書塾中課讀之本耳」とある。

(23) 註（8）既出の「滔州教授陳孚由墓誌銘」には「（陳孚由）授昌州教授以歸、四方士子從講學者甚衆、學舍不能容。則請於州開貢院以館之。……昌元士人楊甲爲六經圖、頗便觀覽。好事者版行之、徧天下。孚由曰、此鄉先生之作、四方宜於此取正、而吾學無其書可乎。遂搜訪善本、重加校正、仍命工筆札善圖畫者寫之、刻之石、以示學者」とあり、科舉の試驗場「貢院」と『六經圖』とが併記されている。

(24) 「纂圖互注本」は主に南宋以後、書肆や書院が刊刻した經、子書のこと。

書名には圖解を附したことを示す「纂圖」、本文の内容に關係する他書の記述を註釋したことを意味する「互注」などの語が含まれる。「纂圖互注本」については清代藏書家の記述に散見されるが、葉德輝『書林清話』（北京燕山出版社 一九九九による）卷六「宋刻纂圖互注經子」は特に詳しい。

(25) 『朱子語類』は王星賢點校本（中華書局 一九八六）に據った。

(26) 田中謙二「朱門弟子師事年攷」（『田中謙二著作集』汲古書院 二〇〇一 第三卷所收）二四四頁による。

(27) 『語類』によると、朱熹やその門弟が參照、作成、議論した圖解には泉州常平司の『地理圖』、『南北對境圖』、薛常州『九域圖』、『華夷圖』、劉樞家『中原圖』、（卷二・理氣）、陳敬之『孝弟爲仁之本圖』（卷二十・論語）、『宗族圖』（卷七十八・尚書）、夏唐老『九疇圖』（卷七十九・尚書）、葉賀孫『儀禮圖』（卷八十五・儀禮）、陸佃『禮象』、陳祥道『禮書』（卷八十七・禮）、『木圖』（卷一二七・本朝）、『博古圖』（卷一三〇・本朝）、『八陣圖』（卷百三十六・歷代）、蘇軾『指掌圖』、『警世圖』、『敬辰圖』、舊東京、闕中、漢唐宮闕街巷の各圖（卷一三八・雜類）がある（太極圖や先天圖など理氣、易、陰陽に關する圖は多數あるため省いた）。

(28) 『詩集傳』は『四部叢刊』續編（台灣商務印書館）所收の靜嘉堂藏宋本に據った。

(29) 『呂氏家塾讀詩記』（『四部叢刊續編』所收の鐵琴銅劍樓藏宋本影印による）朱熹後序には「至於本朝劉侍讀、歐陽公、王丞相、蘇黃門、河南程氏、横渠張氏始用己意有所發明……蓋不待講於齊魯韓氏之傳、而學者已知詩之不專於毛鄭矣」とある。

(30) 『語類』卷八十には「詩序實不足信。向見鄭漁仲有詩辨妄、力詆詩序、其閒言語太甚、以為皆是村野妄人所作。始亦疑之、後來子細看一兩篇、因質之史記國語、然後知詩序之果不足信」とある。

(31) 『呂氏家塾讀詩記』朱熹後序には「……及其既久、求者益衆、說者愈多、同異紛紜、爭立門戸、無復推讓祖述之意、則學者無所適從、而或反以爲病」とある。

(32) 『語類』卷八十には「某自二十歲時讀詩、便覺小序無意義。及去了小序、只玩味詩詞、又覺得道理貫徹。當初亦嘗質問諸鄉先生、皆云序不可廢、而某之疑終不能釋。後到三十歲、斷然知小序之出於漢儒所作、其為繆戾、有不可勝言。東萊不合只因序講解、便有許多牽强處。某嘗與言之、終不肯信。讀詩記中雖多說序、然亦有說不行處、亦廢之」とある。

(33) このような解釋法に言及した記載は多い。一例としては『語類』卷八十に「學者當興於詩、須先去了小序。只將本文熟讀玩味、仍不可先看諸家注解、看得久之、自然認得此詩是說箇甚事」とある。但し、この解釋法は『詩經』に限らない。『語類』卷十・讀書法に「讀書之法、先要熟讀。須是正看背看、左看右看。看得是了、未可便說道是、更須反覆玩味」とあり、朱熹は讀書全般において「熟讀」「玩味」という方法を重視していた。

(34) 程顥の讀詩法について『呂氏家塾讀詩記』卷一「綱領」は「明道先生善言詩、未嘗章解句釋、但優游玩味、吟哦上下、使人有得處」という謝良佐（一〇五〇～一一〇三）の言を引いている。また「詩序」を重視したことは同書卷一「大小序」に「程氏曰、學詩而不求序、猶欲入室而不由戸也」や「或問詩如何學。（程顥）曰、只於大小序中求」とある。